

巻頭言 「弟子たちのように聞く」

宇野 元

神がこの世を 造られた日、
その時のように 神は語る。
神が与えた 永遠の言葉、
弟子たちのように 私も聞く。

『讚美歌 21』所収の「朝ごとに主は」(472 番)は、「善き力にわれかこまれ」(469 番)と共に、芦屋教会に集う私たちが親しむのにふさわしい讚美歌であると思います。「朝ごとに主は」の歌詞は、ディートリヒ・ボンヘッファーと同じ時代を生きた、ヨッヘン・クレッパーという詩人によるものです。この人もナチス・ドイツの社会の中で大きな苦難を経験しました。

二人に共通する習慣があります。彼らは「ローズンゲン」という聖句集を愛用していました。これは日ごとに旧約と新約の短い聖句を記したものです。1731年に最初にドイツ語で出版され、そののち世界で用いられるようになりました。2018年の時点で61言語におよぶ国や地域の人々が、毎日、同じ聖句を読んでいます。日本では「日々の聖句」という書名で出ています。きょう出会う出来事は御手のうちある。しかし御手は目にみえず、そのみわざは、しばしば極めてひそやかな仕方になされる。この現実のなかで、キリスト者は確かな支えを必要とします。そのために、ボンヘッファーも、クレッパーも、聖書から一日分の言葉を必要としました。

1938年の受難週のある日、クレッパーは次の聖句を心にとめて、詩作をおこないました。「主は朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし、弟子として聞き従うようにしてください。……わたしは知っている、わたしが辱められることはない、と。わたしの正しさを認める方は近くいます」(イザヤ書 50, 4.7.8)。上記の日本語の歌詞は、原文では次のように記されています。「神があの日のように語ってください / 世界を造られた日のように。 / すると、不安と嘆きはおさまり / 神の招きだけが重みをもつ。 / 永遠に誠実な言葉 / 私たち人間への神の誓いの言葉を / 再び私はお受けする / 一人の弟子が聞くように。」

不安と嘆きはみずから変化しない。ただひとつ、力ある言葉が私たちに不安と嘆きから解放し、生きることに向かわせてくれる。私たちを弟子の一人とし、任務を受けとり、行なう者にしてください。